

## アトモスフィア

## 智の真空地帯と研究のニッチ

井上正康\*

今年、Charles Darwin が誕生して 200 年、「種の起原」が出版されて 150 年になる。突然変異と自然選択が今日の生命世界を創成してきたことを明らかにした進化論は、時代を超えて人々の生命観や思想に大きな影響を及ぼしてきた。生物進化は「強いから生き残れるとは限らず、環境への適応力が生存の基盤であること」を教えてくれる。生物の歴史では絶滅も日常茶飯事であり、それ故にこそ多様性が生存の要であった。近年、個人の処理能力を超える情報の洪水に曝されている研究者は、ともすれば流行に飲み込まれて没個性的な研究に走りがちである。その情報を提供している分子生物学的研究法は実験結果を＋か－の二進法で解釈するものであり、その化学量論的基盤は脆弱である。生命現象の背景にある多様な物質代謝を化学量論的に解明する生化学者の視点は、明暗の境を旅する医学生物学研究においても重要なニッチであり続けている。

独創的な研究を育むには裾野の広い多様なニッチで研究できる雰囲気が必要である。流行に振り回されず、犀の角のごとく独自のニッチを歩むには強靱な孤独力が必要である。情報の伝達速度が緩慢だった時代には、「連帯を求め、孤立を恐れず」という標語が多くの若者の心を捉えて大きなエネルギーとなった。しかし、精神論で鼓舞しても個人の努力でカバー出来る範囲には限界がある。多様なニッチで研究できることを支援する文教政策と経済的環境の整備も不可欠である。

米国発の世界的不況にもかかわらず、今夏には日本政府が突発的に数千億円もの研究費をバラ撒いた。研究費が増えること自体は大変喜ばしい事である。巨額を投じたアポロ計画では月から眺めた 1 枚の地球の写真が世界に届けられ、「ガラスの様に壊れやすい地球生命系」という意識革命を誘発した。ゲノム計画も「ヒトやサルとの遺伝的差異は誤差の範囲であり、地球の全生命系は数十億年を共に旅してきた仲間である」とのメッセージを世界に発信し、人々の思想や生命観に大きな影響を与えている。残念な事に、今回の突発的巨額予算は無計画な不況対策と政権交代の危機感が誘発した一過性の癲癇発作の様なものであり、その結果に智のパラダイムシフトを望むことはできそうにない。マスコミ報道後にこの巨額予算の事を知った日本学術会議も「寝耳に水である」と狼狽していた。これは日本政府にとっては本会議が無いに等しい存在であることを示す悲しい実態である。全国の大学も COE や GCOE の獲得でラットレースを強いられ、「研究を楽しむ余裕」を喪失しつつある。明日を担う若手研究者には巨額でなくても安定に研究を続けられるリーズナブルな額の研究費が命綱であり、裾野の広い多様な分野から重要な研究が発芽してくる。医学研究も流行から距離を置く事は難しいが、患者や病気は流行と無縁である。流行や効率主義が暴走すると福祉文化などはひとたまりもなく崩壊する。深刻な医療崩壊現象もその一例にすぎない。

生物進化は無目的で無方向性である。しかし、人間はその軌跡と現存生物の研究から生命と宇宙を構築する共通の原理を解読し、それを思想へと昇華させる知能を獲得した生物である。もっとも、我々の体内には悠久の時間を途絶える事無く生き延びてきた生物の生存能力に加え、両生類から哺乳類にまで共通する無意識的本能のソフトも組み込まれている。このことが素晴らしい文明や文化を創成すると同時に、不毛な競争や戦争を起し続けている理由である。「末は博士か大臣か！」と右肩上がりの時代は上昇志向の強い若者にそれなりの夢と希望を与えてきた。しかし、今や博士号取得者も派遣切りに遭い、「博士は末か廃人か！」とネットやサラ川で詠われる時代になった。この様な時代の若者に我々はどうの様な夢を与えられるであろうか。学問の絶滅を予感させる文教科学政策や歪な予算決定・配分機構に対し、日本学術会議や学会は己の存在意義を賭けてあるべき姿への進化圧となる戦略的活動を展開する責務がある。長年に渡り研鑽を続けてこられた学会員諸氏の叡智の見せ所である。

私は岡山大学、熊本大学、ニューヨークやボストンの大学で多くの素晴らしい師に出会う事ができた。何れの師も権力志向の少ない筋金入りの学徒であり、その後ろ姿から色々な夢と学問することの楽しさを学ばせて頂いた。大学で教鞭をとる時間も残り少なくなってきたが、未だに貧弱な己の後ろ姿に恥じ入っている。幸いにも学問の発展的継承は、努力を続けることにより初老の凡脳にも「木も森も視える鳥瞰図的世界」を垣間みさせてくれる。今、科学が限りなく面白い時代である。ヒトは何故神を創ったのか？脳は脳を何処まで理解出来るのか？ Darwin も密かに問い続けていた森羅万象への疑問と智の真空地帯を求めて、ささやかなニッチを旅しながら後ろ姿を磨きたいと願っている。

\*大阪市立大学・分子病態学講座